２０２６年度大学院入試問題（２０２５年　９月１０日実施）

文化交渉学 専攻＿＿＿＿＿＿ 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（中国語）／専門科目（　　）

試験時間：（ 90 ）分

問題　右の中国語の文章を読み、下線部①～④をわかりやすい日本語に翻訳しなさい。

（出典：李丹柯『女性、戦争与回憶』香港中文大学出版社、2013 年、48～49 頁）

文化交流学 専攻　　領域（ 博士前期/修士・博士後期・前後期共通 ）

試験科目：第　外国語（ 英語 ）／専門科目（　　）

試験時間：（ 90 ）分

次の文章を日本語に訳しなさい。

Two gentlemen who were in the lavatory at the time tried to lift him up: but he was quite helpless. He lay curled up at the foot of the stairs down which he had fallen. They succeeded in turning him over. His hat had rolled a few yards away and his clothes were smeared with the filth and ooze* of the floor on which he had lain, face downwards. His eyes were closed and he breathed with a grunting noise. A thin stream of blood trickled from the corner of his mouth.

These two gentlemen and one of the curates** carried him up the stairs and laid him down again on the floor of the bar. In two minutes he was surrounded by a ring of men. The manager of the bar asked everyone who he was and who was with him. No one knew who he was but one of the curates said he had served the gentleman with a small rum.

—Was he by himself ? asked the manager.

—No, sir. There was two gentlemen with him.

—And where are they ? No one knew; a voice said:

—Give him air. He's fainted.

The ring of onlookers distended and closed again elastically. A dark medal of blood had formed itself near the man's head on the tessellated floor. The manager, alarmed by the grey pallor of the man's face, sent for a policeman.

His collar was unfastened and his necktie undone. He opened his eyes for an instant, sighed and closed them again. One of the gentlemen who had carried him upstairs held a dinged silk hat in his hand. The manager asked repeatedly did no one know who the injured man was or where had his friends gone.

*the filth and ooze 汚物と泥　　**curate：バーテン

(James Joyce "Grace" in *Dubliners,* Penguin Books, "Modern Classics", 2000, p. 149)

文化交渉学 専攻＿＿＿＿＿＿ 領域（ 博士前期/修士 ・ 博士後期・前後期共通 ）

試験科目：第　　外国語（　　）／ 専門科目（小論文）

試験時間：（ 60 ）分

次の文章（原武史『日本政治思想史』）を読んで、以下の問に答えよ。

問一　「空地」と「広場」の相違について、この文章の内容に沿って百字程度でまとめよ。

問二　この文章に引用されたロラン・バルトの「空虚な表徴」について、「風呂敷包み」という言葉を用いて説明せよ。

問三　この文章を参照しながら「政治」と「空間」について、自己の考えを述べよ。

丸山眞男は、講演をもとにした「政事の構造―政治意識の執拗低音―」という晩年の論文で、政事という言葉の由来は「奉仕事」であり、その主語は「君」ではなく、「君」に奉仕する「臣」や「連」だとする本居宣長『古事記伝』十八之巻から触発されつつ、こう述べています。

政事が上級者への奉仕の献上事を意味する、ということは、政事がいわば下から上への方向で定義されている、ということでもあります。これは西洋や中国の場合と、ちょうど反対と言えます。〔中略〕日本では「政事」は、まつる＝献上する事柄として臣のレヴェルにあり、臣や卿が行う献上事を君が「きこしめす」＝受けとる、という関係にあります。

（松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男集』第十二巻、岩波書店、一九九六年所収）

丸山によれば、ここに日本の「政事」を一貫する特徴がよく表れています。

なお政治学者の成沢光は、この論文を「文献史料（テクスト）上の用語例を時代背景（コンテクスト）の差異を軽視して分析し、通時的な「自然的な傾向」なるものを取り出そうとする方法自体に問題が多い」（第1章前掲『政治のことば』）と批判しました。成沢によれば、丸山の関心は日本思想史上「繰り返しあらわれているところの一つの形」に集中しているために、歴史的文脈に応じた政治語彙の特徴としてとらえきれていないのです。しかしおそらく、そんなことは丸山も百も承知のはずで、文献史料からいったん離れて日本における「政事」の通時的傾向を分析することは、歴史学と異なる政治思想史学の一つの方法としてあり得ると思います。したがってここでは丸山の分析に従うことにします。

丸山の言う「上級者への奉仕の献上事」としての政治は、大正後期に近代天皇制の刷新が図られることで、奉仕の担い手が「臣」から「臣民」へと拡大されるとともに、空間的にも植民地を含む国家全体へと拡大されたのです。そのために利用された空間が、東京の宮城（現・皇居）前広場であり、全国各地の練兵場や飛行場、運動場、学校のグラウンドといった、行幸や行啓の際に万単位の臣民を収容できる「空地」でした。

こうした「空地」は、はじめから「国体」を視覚化するための政治空間として設計されたわけではありません。練兵場や飛行場は軍事施設ですし、運動場や学校のグラウンドはスポーツや学校行事のための施設です。宮城前広場ですら、一九二三（大正一二）年の関東大震災で約三〇万人の被災者を収容するまでは、それほど活用されていませんでした。

ところが広場に皇太子や天皇が現れるや、そこはたちまち政治空間へと一変する。言説化した政治思想が空間をつくり出すのではなく、逆に空間が言説化されない政治思想をつくり出すのです。敗戦後も天皇が巡幸の途上、全国各地で熱狂的に歓迎されたのは、たとえ空襲により焦土と化しても「空地」が残ったからであり、天皇が再び現れるだけで直ちに「君民一体」の空間が再現されたからでした。

この点は、中国とは異なります。中国では、北京の天安門広場が中華民国の時代から使われてきましたが、一九四九年の中華人民共和国の成立を機に、「革命」によって生まれた国家の正統性を誇示する政治空間として生まれ変わっただけでなく、北京以外の都市、町、村にも政治的な集会のための広場がつくられたからです（市川紘司『天安門広場　中国国民広場の空間史』、筑摩書房、二〇二〇年およびウー・ホン『北京をつくりなおす　政治空間としての天安門広場』、中野美代子監訳、大谷通順訳、国書刊行会、二〇一五年）。

中国文学者のウー・ホンは、「公共広場は、一九五〇年代から七〇年代にかけてすさまじい熱狂のもとで建設された。それは、政府がますます狂信的な課題を追求して、終わりのない政治運動を繰りひろげた時代でもあった」（前掲『北京をつくりなおす』）と述べています。広場は指導者と人民が直接相対するための場所であり、社会主義のイデオロギーに根差した人民としてのアイデンティティを確認するための政治空間としてつくられたわけです。

日本と中国の違いは、風呂敷とカバンの違いにたとえられるかもしれません。カバンというのは、それ自体が品物を入れる形をしています。品物を入れるという明確な目的に沿ってカバンが製造されるわけです。これは中国で社会主義のイデオロギーにしたがって人民を可視化するために広場がつくられるのと似ています。一方、風呂敷というのは、一見ただの布きれにすぎません。ところが品物が入ると、にわかにカバンと同じ役割を果たすわけです。これは日本で「空地」に天皇が現れると、そこが「君民一体」の「国体」を視覚化するための政治空間へと早変わりするのと似ています。

フランスの思想家、ロラン・バルト（一九一五～八〇）は、一九六六年から六八年にかけて日本を三回訪れ、『表徴の帝国』（宗左近訳、ちくま学芸文庫、一九九六年）を著しました。そのなかで、「［日本では］すべての市民は町にいるときなんらかの風呂敷包み、すなわち空虚な表徴を所有し

ていて、それを後生大事にささげもって、すみやかに運搬する」と述べています。風呂敷は「空虚な表徴」、すなわちシニフィエ（記号内容）を欠いたシニフィアン（記号表現）だと言うのです。同書でバルトは皇居を「空虚な中心」と呼びましたが、皇居前広場もまた「空虚な表徴」と呼ぶことができます。

中華人民共和国では、九〇年代以降、公共広場の一部を芝生や公園に変える動きが出ています（前掲『北京をつくりなおす』）。それは都市空間を非政治化し、社会主義のイデオロギーを和らげることを意味しています。しかし日本では、皇居前広場を含めて「空地」のまま残ったことで、戦前と戦後の天皇制の間に強い連続性が生まれました。作家の坂口安吾（一九〇六～五五）は、一九四八年に発表した「天皇陛下にささぐる言葉」（『坂口安吾全集』15、ちくま文庫、一九九一年所収）のなかで、「天皇が現在の如き在り方で旅行されるということは、つまり、又、戦争へ近づきつつあるということ、日本がバカになりつつあるということ、狐憑きの気違いになりつつあるということで、かくては、日本は救われぬ」と批判しています。

さらに、儒教の天子ないし中国の皇帝と日本の天皇の間には重大な違いがあります。「天」から天命を受けることで支配の正統性を与えられる天子（皇帝）とは異なり、天皇は通常の場合、究極の支配者にはなり得ません。なぜなら近代天皇制では、「天皇自身も実は皇祖神にたいしては、また天神地祇にたいしては「まつる」という奉仕＝献上関係に立つので、上から下まで「政事」が同方向的に上昇する型を示し、絶対的始点（最高統治者）としての「主」（Herr）は厳密にいえば存在の余地はありません」（前掲「政事の構造」。傍点原文）という丸山の説明が、そっくり当てはまるからです。

具体的に言えば、天子（皇帝）は「祭天」、つまり「天」を祭る儀式を行うものとされるのに対して、明治以降の天皇は宮中で大嘗祭（だいじょうさい）や新嘗祭（にいなめさい）をはじめとする多くの祭祀を行うほか、アマテラスをまつる三重県の伊勢神宮や、奈良県の神武天皇陵をはじめとする歴代天皇陵に参拝するようになります。[2] その際に天皇はアマテラスや歴代天皇や皇族の霊、あるいは天神地祇（ちぎ）と呼ばれる神々に向かって拝礼したり、御告文（おつげぶみ）と呼ばれる祝詞（のりと）を奏上したりしますが、臣民がその空間を見ることはありません。ただし例外があり、天皇が勅語や詔書を発する場合には、究極の支配者として振る舞おうとすることは前述のとおりです。